

Hokkaido Nougyou Doboku
Sokuryou Sekkei Kyoukai Jihou

農土測協時報



宗谷のタンチョウ フィーチャリング オジロワシ
内外エンジニアリング北海道(株) 藤原 弘昭



2026年を迎えて

一般社団法人 北海道農業土木測量設計協会

会長 橋 本 智 史



新年あけましておめでとうございます。

皆様には、健やかに新春を迎えられたことと、お慶び申し上げます。

また、日頃より当協会の事業活動と運営にご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

昨年は、古古古米が流行語大賞にノミネートされるなど、米の販売価格が注目された年でした。販売価格が高止まりとなる中、小泉農林水産大臣の陣頭指揮により備蓄米が市場に供給され、2,000円台の備蓄米を求める長蛇の列が各所で見られました。一方、米の仕入れについては、JAとコメ卸業者との争奪戦といった状況となり、生産資材等の高騰によって厳しい状況が続いている生産者にとっては、収益の改善により、希望が持てる生産環境になったことと思います。

毎日の食卓に上がるコメは、消費者側からはできるだけ安く買いたいものですが、生産者側にとっては、再生産可能な利益がなければ経営は維持できないわけで、双方が納得できる価格形成が進むことが重要です。そうしたことから、生産コスト削減に大きな効果があるスマート農業に対応する農地の大区画化などの必要性を改めて認識させられた年となりました。

昨年4月に策定された「食料・農業・農村基本計画」では、初めて本道が「主要穀物などの主産地」として明記されました。大規模で専門的な農業が展開されている本道農業に対し、我が国の食料安全保障の確保への役割として、生産力の大幅な強化が期待されています。

そのような中、高市新内閣が誕生し、責任ある積極財政の旗印のもと、政府は、成長戦略などを柱とする総合経済対策を決定し、その裏付けとなる令和7年度の補正予算が12月の臨時国会において成立いたしました。

内訳について、農業農村整備関連では、平成28年から継続しているTPP対策をはじめ、国土強靱化対策、そして、農業の構造転換を集中的に進めるための初動5か年対策などの重要な農業施策予算が含まれています。

北海道にも前年を上回る額が配分される見込みですが、本道農業の生産力の強化に向けては、農地の大区画化や排水改良、老朽化した施設の整備等を積極的に推進することが重要です。当協会といたしましても、土地改良関係議員の「進藤かねひこ」参議院議員をはじめとする国会議員等に対し、国会での活躍を応援し、予算の安定的確保等を働きかけて参りますので、皆さまのご支援ご協力をお願い申し上げます。

北海道農政部の動きでは、令和6年度からBIM/CIM活用業務が試行されており、令和7年度においては十勝を中心に4振興局で11業務が実施されています。昨年度の試行業務では、測量設



計段階における BIM/CIM の優位性として、測量段階では、ほ場周辺の点群データを一体的に効率的に取得できること、受益者説明には、受益者に判りやすい設計図を提示でき、手戻りが減るなどの効果が確認されました。また、今後の可能性として、積算数量の自動算出への研究が進んでいるなど、発注者・受注者の業務軽減にむけて、今後も、業務数は拡大することが予想されます。

また、こうした新たな取り組みが進められる中においても、発注者の求める質の高い成果品を納品することが協会の責務であります。当協会としても、人材育成・技術の研鑽が急務となっている状況において、各種研修会の開催や、測量士・技術士資格取得支援を継続してまいります。

昨年10月に開催した、長野・富山・石川方面での経営者研修会は会員39名の参加を戴きました。黒部立山アルペンルートでは、晴天にも恵まれ、素晴らしい大自然の中で日本の土木技術の高さを実感するなど、見識を深めることができました。今年も秋の開催にむけて準備を始めたいと思います。

結びになりますが、本年が皆様にとりまして、輝かしい年となりますようご祈念申し上げ、新年のご挨拶といたします。



新年にあたって

参議院議員

進 藤 金日子



あけましておめでとうございます。

北海道農業土木測量設計協会の会員並びに関係の皆様には、私の政治活動にご理解とご支援を頂戴し、厚く感謝申し上げます。

本年も現場主義、地域主義に徹し、農業農村の振興に努めてまいりますので、よろしくご指導をお願い致します。

さて、去年は、農政、国土強靱化、我が国経済にとって節目の年であったと考えています。土地改良法改正、食料・農業・農村基本計画の策定、農業構造転換集中対策の開始、新たな土地改良長期計画と第一次国土強靱化実施中期計画も策定されました。10月に高市早苗内閣が発足し、日本経済強靱化計画（通称サナエノミクス）が提唱され、我が国の経済転換の期待も広がっています。

3月の土地改良法の改正では、農業生産の基盤の整備に加えて保全に必要な施策を講ずることが明定され、土地改良区が市町村等と連携していわゆる水土里ビジョンを作成し、土地改良施設及び末端施設の保全を行う仕組みを位置付けました。

4月に策定された食料・農業・農村基本計画では、令和7年度からの5年間で農業の構造転換を集中的に進めることとし、「農地・水の確保」、「地域計画に基づく担い手への農地集積・集約化」、「農地の大区画化」等に関し具体策を位置付け、また、「食料システム全体で合理的な費用を考慮した価格形成を推進」することも位置付けました。自民党は、基本計画の実施に関して別枠予算の確保を求め、私はこれらの事業規模の積算を託され、実務的に2.5兆円の積み上げを行いました。

9月には新たな土地改良長期計画が策定され、「基盤整備による生産コストの低減」、「農業水利施設の戦略的な保全管理による持続的な機能確保」、「激甚化・頻発化する災害に対応した防災・減災対策」等に関する5つの目標を設定しました。

6月には第一次国土強靱化実施中期計画が策定され、令和8年度から令和12年度に推進が特に必要となる施策目標を設定、5年間の事業規模を「おおむね20兆円強程度」を目途としました。土地改良では、防災重点農業用ため池の防災・減災対策、農業水利施設等の老朽化・耐震化対策などを進めることとしています。



11月には、総合経済対策が閣議決定され、食料安全保障の確立、防災・減災・国土強靱化等を推進していく上で必要な対策と予算が盛り込まれ、土地改良関係では2,439億円が措置されました。

これらの政策を進めるためには土地改良の推進が重要です。特に農業構造転換集中対策期間の5年間では別枠予算も確保して強力に進めていく必要があります。令和8年度に執行可能な土地改良予算は、令和7年度補正2,439億円と令和8年度概算決定4,504億円の合計6,942億円（昨年比442億円増）となっています。予算のスムーズな執行に対する貴協会による技術支援とご協力をお願いいたします。私は本年も土地改良の推進のため努力してまいりますので、皆様方からの益々のご指導、ご支援をお願いし、新年のご挨拶と致します。





令和7年度 経営者研修会報告 ～前編～

東和工研 株式会社
代表取締役 田 中 雅 人

令和7年度経営者研修会は、10月1日から4日までの三泊四日で日本の高度経済成長黎明期を支えた黒部ダム、豊かな水源を育む日本アルプス立山連峰、日本の中山間地の原風景である合掌造りが保存された相倉地区、そして米どころである加賀百万石の中心地金沢を巡る行程でした。

1日目 松本城

参加者42名が最寄りの空港から出発し、東京駅で集合の後に新幹線で最初の目的地である長野へと向かいました。当日の気温は集合地東京駅、目的地長野県ともに最高気温24℃と長袖では汗ばむ陽気でした。北海道は15℃前後といったところでしたので、やはりまだまだこちらは温かいと感じたところです。



【東京駅】

さて、1日目（10月1日）は行程のほとんどが移動のため、研修は松本城の見学のみでした。

この松本城、姫路城や大阪城といった知名度の高い城と比較すると地味な印象を私は持っておりましたが、とんでもない誤解でした。詳しく語ると本が一冊書けてしまうでしょうから特徴を簡単にまとめますと、太平洋戦争の戦災を逃れて現存する12天守のひとつであり、特に五重六階の天守としては日本最古級、戦前である1936年に天守群が国宝に指定され、戦後制定された文化財保護法により1952年に姫路城に続いて改めて国宝に指定された由緒正しい大変貴重な城郭とのことでした。

松本城到着が最終入場時間ギリギリとなり、走って入場というハプニングもありましたが、内部は築城当時の面影を随所に感じる、まさに歴史が刻まれた城郭でした。特に階段の急勾配は現代では考えられないような水準で、当時の侍はよほど足が長いか股関節が柔らかかったのかしら、などと益体もない考えが頭を巡りました。

時間の関係で駆け足での見学となってしまったのは少々残念ではありましたが、歴史の重みを感じるには十分な体験となりました。



【松本城①】

この日の宿泊先は松本市内の「アルピコプラザホテル JR 松本駅前」で、夕食は「割烹 仙岳」での和食でした。総会や理事会等で席を共にしたことのある方も多いたはいえ、やはり旅先での交流はまた一味違ったものであり、大いに親交を深めて1日目は終了しました。



【松本城②】



2日目 黒部ダム（立山黒部アルペンルート）

私としては今回の研修会で最も楽しみにしていた、黒部ダムを含む立山黒部アルペンルートが2日目の行程です。

この「立山黒部アルペンルート」を簡単に説明すると、長野県と富山県を隔てる立山連峰を、6種の乗り物を乗り継ぎながら横断するツアーです。ルートの途中には、日本で最も高い堤高を誇る黒部ダムをはじめとして、立山連峰を一望できる大観峰、日本の鉄道駅における最高地点であり遊歩道散策や登山等の拠点となる室堂、といったように、豊かな山岳の自然を身近に体験できる機会が用意されています。我々は北海道という自然豊かな土地で暮らしておりますが、標高2000mを超える山岳の自然は普段目にする北海道の自然とはまた一味違った景色を見せてくれるのではという期待が膨らみます。



【黒部ダム】

この日も最高気温は24℃予想と半袖が丁度よさそうな気候ですが、本日の目的地はなんといっても「山」です。標高2000m超であることを考えれば10℃前半になることも十分に考えられるため、かばんにはしっかりと温かい服装も用意して出発しました。

ホテルを出発して、まず向かったのが立山黒部アルペンルートの長野県側出発地となる「扇沢（標高1433m）」です。ここから黒部ダムまでは大部分がトンネルとなりますが、ここを最初の乗り物である電気バスで移動します。このトンネルは黒部ダム建設当時に資材運搬用として掘削されたとのことですが、破碎帯の存在もあって大変な難工事だったとのことでした。



【ケーブルカー乗り場】

およそ15分でトンネルを抜けると、「黒部ダム（標高1470m）」に到着です。主な諸元は堤高186m、堤頂長492m、貯水容量約2億立方メートルで、堤高は日本の全ダム中1位、堤頂長と堤体積は日本のアーチ式ダム中1位と、まさに名実ともに日本を代表するダムです。黒部ダムを一望できる展望台まではさらに220段の階段を上する必要がありますが、丁度観光放水をしている時期でもあり、膝に鞭打って上る価値のある絶景でした。

堤頂を横断して黒部ダムに別れを告げ、次は立山連峰を目指します。まずは黒部ダムから2つ目の乗り物となるケーブルカーで「黒部平（標高1828m）」へと移動します。この黒部ケーブルカーは、日本唯一の全線地下式（トンネル）で、昭和44年の開業当初の客車が現在も使われています。

黒部平では休憩を兼ねての昼食タイム。メニューはなんと鰻重。標高1800mを超える高所での鰻重は人生初体験ですが、黒部ダムの階段での疲れを癒し、これからの標高2000m超えを目指す行程に向けた英気を養うにはもっていこいの贅沢メニューでした。



【黒部平】



【うな重】



贅沢な昼食の後は、3つ目の乗り物となるロープウェイで「大観峰（標高2316m）」へと移動です。このロープウェイは途中に支柱のないワンスパンロープウェイで、高低差488mの絶景を360度楽しめる素晴らしい体験でした。もちろん、ワンスパンロープウェイとして



【大観峰から黒部平】

では日本最長。この立山黒部アルペンルートには様々な日本一が隠されていることに驚きです。

大観峰は、その名の通り立山連峰を一望できる絶景が最大の特徴です。紅葉も一部に見ることができて、見渡す限り稜線が続くスケールの大きな景色を堪能できました。



【大観峰】

乗り物による山登りもいよいよ最後。4つ目の乗り物となる電気バスで本日の最高標高地点となる「室堂（標高2450m）」へと向かいます。実は、最初に乗った電気バスとこちらの電気バスは、当初は共にトロリーバスで運行されていましたが、保守部品の調達困難等を理由に現在は廃止されて電気バスへと転換されています。



【みくりが池】

室堂では、近隣の「みくりが池」まで山岳散策を楽しみました。この「みくりが池」はおよそ1万年前の噴火口跡に水が溜まってできた火山湖とのことで、高山植物がみられる周囲の景色と相まって、山岳観光の醍醐味を存分に味わうことができました。



【電気バス】

魅力あふれる立山連峰とも、そろそろお別れです。大観峰から室堂への移動で既に長野県から富山県へと入っていますが、ここから富山県側の入り口である立山駅へと向かいます。まずは5つ目の乗り物となる立山高原バスで「美女平（標高977m）」へ。一気に1500mほどをバスで下ることになります。車窓からも素晴らしい景色を楽しむことができましたが、皆さん少々お疲れなのかバス内では舟をこぐ人もちらほら見られました。



6種の乗り物もいよいよ最後となります。6つ目の乗り物となるケーブルカーで到着地、富山県側からのルートでは出発地となる「立山駅（標高475m）」へと移動します。こちらの立山ケーブルカーは、かつて黒部ダム建設用の資材を積んでいたこともあって、大変珍しい荷台付きのケーブルカーです。この荷台は今でも現役で活躍しており、スキー等の大きな荷物はこの台車に載せて運ぶのだそうです。



【室堂】

以上、日本が誇る土木インフラである黒部ダムと、日本アルプスの大自然を満喫した2日目でした。



令和7年度 経営者研修レポート ～後編～

技研測量設計 株式会社
代表取締役 筒井 寛 幸

令和7年度の経営者研修会は参加者42名で10/ 1～4の3泊4日、黒部ダムを主として長野・富山・石川の3県を巡る行程です。1～2日目の長野県・富山県に引き続き、私は3～4日目の富山県・石川県をレポートします。

3日目

前日の「立山黒部アルペンルート」及び夕食後に徒歩で向かった日本一美しいスターバックスコーヒー「富山環水公園店」の長距離散策の影響により、既に身体が悲鳴をあげていますが、まずは富山湾の代表的な景勝地「雨晴海岸」からスタートです。

雨晴海岸（富山県高岡市）

雨晴海岸は、万葉集に「渋谿（しぶたに）」と詠まれた白砂青松の景勝の地で日本の渚百選の一つにも選ばれており、晴れた日には富山湾越しに立山連峰が見えることで知られています。

海岸内にある「義経岩（よしつねいわ）」は、源義経が奥州へ落ち延びる途中、にわか雨の晴れるのを待ったという岩で、地名「雨晴（あまはらし）」の由来となっており、岩の上には小さな祠「義経神社」が祀られています。

雨晴海岸が位置する高岡市は藤子・F・不二雄の出身地でもあり、海岸の正面にある「道の駅雨晴」には多数のドラえもんグッズが販売されていました。



【雨晴海岸】

若鶴酒造（富山県砺波市）

1時間弱バス移動し、次に訪れたのは「若鶴酒造」です。

若鶴酒造は文久2年（1862年）に清酒製造業として創業し、大正7年（1918年）に法人化されました。主な事業内容は清酒・ウイスキー・焼酎・リキュールなどの製造および販売で、使用している主な酒米は、富山県産の「五百万石」や「雄山錦」といった、特有の気候と土壌が育む銘柄米です。

戦後は原料米の統制など厳しい時代を経て、ウイスキー蒸留所「三郎丸蒸留所」を擁し、清酒とウイスキーの両輪で発展してきました。清酒部門では「若鶴」や「苗加屋（のうかや）」といった銘柄が代表的です。



【若鶴酒造】

施設内の「大正蔵」にはショップやレストランのほか、入口にはコカ・コーラ社の「いろはす」で採水されている水と同一の仕込み水の汲み場がありました。ショップでは12種の試飲コーナーが設けられており、係員の方から持ち帰り可能なお猪口を受け取ります。あいにく私は体質的にアルコールを受け付けないため、数名の諸先輩方に感



想を伺いました。多かったコメントは「飲みやすい」。

昼食はショップ隣接の大正蔵ホールのレストラン「竈 flamme 炭三郎」で、紅ずわい蟹の炊き込みご飯をはじめとした「富山湾の海鮮かまど飯御膳」をいただきました。このホールとレストランは挙式も可能で、去年は4組が結婚式を挙げられたそうです。



【大正蔵レストラン】

相倉合掌造り集落（富山県南砺市）

午後からは「相倉合掌造り集落」を訪れました。

この集落は世界遺産にも登録されており、昔ながらの日本の原風景を今に伝えています。

まず目を引くのは、茅葺き屋根が美しく並ぶ合掌造りの家々です。急勾配の屋根は豪雪を自然に滑り落とすための形状になっています。合掌造りの"合掌"とは、手を合わせた形に似ていることから名付けられたとのこと。屋根の内部は広く、養蚕なども行われていたそうです。



【相倉合掌造り集落】



【合掌造り 勇助】

集落には現在も住民が暮らしており、観光地でありながらも生活の息づく場所です。地元の案内人の方からは、集落の維持に関わる苦労や課題なども伺いましたが、協力しながら保全活動が続けている姿勢に感銘を受けました。

集落内の店舗では、昔ながらの玩具の販売からご当地山菜がたっぷり入った「合掌そば」まで多数取り揃えがありました。私はソフトクリームを頂きましたが、残念ながらオリジナルではなくスジャータの汎用品でした。

ひがし茶屋街（石川県金沢市）

富山から石川に移動し、金沢市の「ひがし茶屋街」を散策。

石畳の小路に伝統的な格子戸の町家が立ち並びます。観光客で賑わう一方で、建物や景観が丁寧に保たれており、古い街並みを守りながら現代の観光と調和しています。通りを歩くとお茶屋や甘味処などさまざまなお店が軒を連ねており、歩くだけでも楽しめます。

敷地内にある国の重要文化財 お茶屋「志摩（しま）」は、文政3年（1820年）創建の本格的な茶屋建築で、当時のままの姿で残されている貴重な建物です。内部には、芸妓が客をもてなした座敷があり、三味線や太鼓を体験できます。

お土産屋も多数あり、中でも印象的だったのは金沢の特産品である"金箔"の華やかさです。化粧品やお菓子、さらには金箔入りのコーヒーまであり、私もお土産として大小の金箔数枚を購入。

帰宅後に7歳と5歳の娘に小サイズの金箔を渡しましたが、5歳の娘はすぐに素手で触り金箔は無残な姿となりました。大サイズの金箔は成人後に渡します。



【ひがし茶屋街】



【志摩】



和乃食はねや（石川県内灘町）

夕食は「和乃食はねや」の和食会席です。能登産のふぐ料理から"のどぐろ"焼きまでさまざまな海鮮料理を堪能することができました。一部、肉食の方からは肉の要望の声も聞こえました。

宴中には芸妓さんが登場し、金沢ならではの伝統芸能を披露してくださいました。優雅な三味線の音色に合わせた舞やお座敷遊びなど、普段なかなか体験できない世界は歴史と伝統を感じさせるものでした。



【芸妓】



【金沢駅 鼓門】

ホテルにチェックイン後は

金沢駅周辺を散策。金沢駅はアメリカの旅行雑誌で「世界で最も美しい駅」に選ばれるほど素晴らしく、駅のいたるところに伝統工芸が見られるほか、正面には金沢のシンボルとなった「鼓門」が構えます。

散策後は口コミ評価の高かったラーメン「弓づき（ゆづき）」にて国産ゆずと能登産の塩を使用した柚子塩ラーメンを食し、3日目が終了しました。

4日目

3泊4日の研修も終わりに近づきます。最終日は金沢市内の「長町武家屋敷跡」からスタートです。

寄稿



【長町武家屋敷跡】

長町武家屋敷跡（石川県金沢市）

金沢市の中心部に位置する「長町武家屋敷跡」は、藩政時代の面影を今に伝える歴史地区です。加賀藩の中級武士が暮らしていた地域で、土塀と石畳の路地が連なり、当時の風情を感じることができます。観光地として整備されていますが、一部には一般の住宅が残り生活の息づかいも感じられる点が印象的でした。



【野村家】

この長町武家屋敷跡の中でも人気が高いのが「野村家」です。加賀藩士・野村伝兵衛信貞の屋敷を公開しているもので、加賀百万石の栄華を象徴する見事な建築と庭園が見どころです。屋内には書院造の座敷や美しい欄間、伝統工芸を感じさせる細部の意匠が施されており、武士の暮らしと美意識が融合された空間でした。当時の武具や書画、生活道具なども展示されており、武家文化の高さと格式を実感することができました。

妙立寺（石川県金沢市）

次に訪れたのは「妙立寺（みょうりゅうじ）」で、通称「忍者寺」として知られています。名前のとおり建物の中には多くの仕掛けや秘密が隠されており、攻め込みに備えるための「防衛寺」として工夫が凝らされています。

外観はごく普通に見えますが内部は4階建て7層構造。案内の方の説明を受けながら中を巡ると、隠し階段、落とし穴、逃げ道、隠し部屋などが次々に現れ、当時の知恵と工夫に感嘆しました。拝観ルールが厳しく、飲酒喫煙のほか撮影・軽装や未就学児の同行も禁止されており、説明中にも度々注意を促されました。



【妙立寺】



兼六園（石川県金沢市）

金沢の代表的な観光地といえばやはり日本三名園のひとつ「兼六園」です。

散策前に、園内の日本最古の噴水前にある「兼六亭」で昼食です。治部煮やお刺身のほか、のどろ茶漬、食後のお茶菓子セットをいただきました。のどろ茶漬は上品な味付けでしたが、濃い味が好みの私はお刺身の使用後に残った醤油を加え、調味料のフードロスをロス。

昼食後は庭園を散策。あいにくの雨模様ですが、広大な園内には霞ヶ池を中心に曲水、石橋、茶屋、灯籠などが絶妙に配置され、江戸時代の造園技術の高さを感じました。



【兼六亭 茶菓子】



【兼六亭 のどろ茶漬】



【兼六園】



【金沢城】

番外編 金沢城（石川県金沢市）

行程には含まれておりませんが、バスガイドさんの計らいにより希望者数名で金沢城に案内いただきました。

石川県が整備している「金沢城公園」としての敷地は約30ha。兼六園とは橋一本でつながっており、往時には庭園も城の一部として設計されていたそうです。石垣ひとつとっても見応えがあり、加賀藩の技術力の高さを感じさせます。天守閣は現存していませんが、広々とした城内を歩くだけでも壮大さが伝わり、歴史を肌で感じる事ができました。

研修を終えて

今回の研修では、各地で地域に根ざした文化や技術、そして人々の努力に触れ、伝統を受け継ぎながら現代の社会と共存していく工夫がありました。

また、旅行を通じて会員同士の交流も深まり、普段は業務で話す機会が少ない方とも親しく意見を交わすことができました。

最後になりますが、旅行の実施にあたり、橋本会長をはじめ企画・運営に携わってくださった皆様、参加された会員の皆様、道中サポートを頂いた事務局の青山様、倉様に心より感謝申し上げます。

この経験を今後の業務や協会活動に活かし、さらなる発展へとつなげてまいります。



【富山環水公園と日本一美しいスタバ】





令和7年度 農業用ため池の技術力向上に向けた実務研修会

令和7年9月18日、会員各社の技術者の技術力向上に向け、施設の老朽化などにより適切な更新や防災機能強化が課題となっている農業用ため池について、調査設計に必要な基礎知識や留意事項などの知識及び技術習得を目的とした研修会を、空知総合振興局産業振興部東部耕地出張所のご協力により、全道各地から53名の参加をいただき開催しました。

当日は、東部耕地出張所会議室をお借りして当協会業務推進委員の赤坂浩氏（ダイシン設計㈱）から「機能診断・耐震性点検・調査設計などに係る留意事項」の説明が行われました。

その後、現在施工中の峰延2号ため池（東部耕地出張所隣接）へ移動し、空知総合振興局産業振興部東部耕地出張所工事第2係長の高島優人氏から「ため池の事業概要及び施工内容」の説明及び赤坂浩氏から「各施設の機能、構造」の説明が行われました。

令和7年度「農業用ため池の技術力向上に向けた実務研修会」次第

日時 令和7年9月18日(木) 13:30～15:30
場所 空知総合振興局産業振興部東部耕地出張所
2階会議室 及び現地（峰延2号ため池）

1 開 会

2 研修内容

- (1) 農業用ため池に係る機能診断、耐震性点検、調査設計などに係る留意事項
(協会業務推進委員 赤坂 浩(ダイシン設計(株))) ……資料1-1、1-2
- (2) [現地] 2号ため池の事業概要及び施工内容について
(空知総合振興局産業振興部東部耕地出張所 高島工事第二係長) ……資料2
- (3) [現地] ため池の各施設の機能、構造についての説明
(協会業務推進委員 赤坂 浩(ダイシン設計(株))) ……資料3
- (4) 質疑応答

3 閉 会

(主催 (一社)北海道農業土木測量設計協会)





株式会社 東亜エンジニアリング

代表取締役社長 若井 衛

はじめに

新年あけましておめでとうございます。新年を迎え、北海道農業土木測量設計協会並びに会員の皆様にとりまして、本年がより一層飛躍の年となりますようご祈念いたします。また、日頃より、皆様には、大変お世話になり、誠にありがとうございます。このたび、「農土測協時報」に、会社紹介の機会をいただき、重ねて感謝申し上げます。

会社紹介

弊社は、昭和53年2月の創設以来、これまで、建設コンサルタント及び補償コンサルタントとして、農業基盤、道路、河川など、広く、道内の社会インフラの整備や維持管理、災害時の支援などに携わって参りました。現在の社員数は、40名を超え、引き続き、高度な技術力の習得に努め、安全・安心な社会インフラの保持等を次世代へ継承していかなければならないと考えております。そのため、発注者から信頼され、社会に役立つ技術者集団を目指して参ります。

社長
紹介



自己紹介

私は、昭和37年に大阪市内で生まれ、大学進学とともに、北海道に移り住み、道職員となっからは、主に、河川事業等の計画、設計、施工管理等の業務に関わりました。道職員退職後、ご縁があって、令和3年に東亜エンジニアリングに入社しました。今年度で、入社5年目、社長に就任して3年目となります。担い手の育成・確保、DXの推進、技術力の更なる向上など、様々な課題はありますが、社員一丸となって、会社の組織力の強化に取り組んで参りたいと考えております。

終わりに

現在、農業を取り巻く社会情勢は、担い手不足や高齢化、生産コストの増加、気候変動による災害の頻発化・甚大化など大変厳しい状況となっています。道内においても、耕地の大区画化・生産性の向上、食料安全保障の確保や、農村の振興などが求められる状況であり、農業農村整備の重要性は益々高まっていくと考えます。弊社としまして、農業生産基盤の整備・保全、スマート農業の導入、持続可能な農業の推進などに向け、関連する調査・測量、設計業務等を通じて、微力ですが一助になりたいと考えております。

終わりになりますが、今後とも、これまでと同様に、協会並びに会員の皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。



株式会社 アサヒ建設コンサルタント

代表取締役社長 櫻庭 満

はじめに

新年あけましておめでとうございます。北海道農業土木測量設計協会の会員の皆様には、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、この度は農土測協時報で社長紹介の機会をいただき、誠にありがとうございます。

会社紹介

弊社は昭和43年の創業以来、今年で創立58周年を迎えます。創業当初は建設会社の起工測量などの下請け業務が中心でしたが、三代目社長の櫻庭慶一の時代に建設コンサルタントとして登録し、設計業務の受注を拡大してきました。

現在は農業土木をはじめ、道路や橋梁の設計などインフラ整備から、老朽化した構造物のストックマネジメントや長寿命化まで、幅広い分野で技術サービスを提供しております。また、本社の旭川と札幌支店を拠点に、70数名の役職員で道内全域のニーズに対応しております。

自己紹介

私は昭和57年に大学卒業後、弊社に入社しました。新人時代は畑総事業の改良山成工や道路・河川の測量設計に携わりました。改良山成工業務では、当時珍しかったコンピューターによる土工量自動計算プログラムを導入し、バグが多発する中で計算処理を徹夜で見守った記憶が今でも懐かしく思い出されます。その後、縁あって北海道開発局へ転職し道路部門の技術職として全道各地で勤務しました。平成25年に弊社へ戻り、令和5年7月から5代目の代表取締役社長として就任し、今年で3年目となります。

終わりに

北海道の農業は、農業従事者の高齢化や担い手不足、気候変動による災害リスクの増大など、多くの課題に直面しています。このような状況下で、建設コンサルタントには高度な技術力と柔軟な発想が求められており、弊社はそれを目指して日々研鑽しております。

社内の課題としては新規採用者の安定化と技術の継承が挙げられます。機械力が進んでいる現在でも、この業界では「人」が最も重要な資産です。より良い人材の確保を重視するとともに、技術力向上のためには技術士取得を奨励し、職員が受験しやすい職場環境づくりに取り組んでいます。

最後になりますが、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



株式会社 ヒロノ測建

代表取締役社長 浅野 遵

はじめに

新年あけましておめでとうございます。橋本会長ならびに北海道農業土木測量設計協会員の皆様には日頃より大変お世話になっております。

令和5年5月に代表取締役社長に就任致しました浅野 遵（じゅん）と申します。この度は農土測協時報の社長紹介の機会を頂き、心より感謝申し上げます。

会社紹介

弊社は昭和46年8月に設立し、関係する皆様のお世話になりながら令和3年には創業50周年を迎え次なる一步を踏み出しているところでございます。

これもひとえに、今まで業務に携わってきた社員が役所の方々と密なコミュニケーションをとり、丁寧な仕事をしてきた賜物と思っております。

農業の分野では、上川地域を中心に調査設計・用地測量を主な業務としており、少しでも地域の発展のお手伝いができるようにこれからも努力してまいります。

自己紹介

私は昭和46年9月14日生まれ亥年の54歳です。平成2年に旭川西高等学校を卒業し、家業を手伝っていたところ縁あって翌年の8月にヒロノ測建に入社致しました。

専門の知識もなく先輩方が何を言わんとしているかもわからずに現場で右往左往していたことを思い出します。その後、用地測量を中心に業務を手掛け平成28年に役員になり令和5年に6代目社長に就任し3年目に至ります。

趣味は若かりし頃（中学生時代）からの切手の収集。切手趣味週間・国際文通週間・国立公園・国宝シリーズなど、改めてじっくり見ると繊細な描写に心洗われます。

又、昨年より、孫と一緒に旅行に年1回行っております。今はどれだけ長く継続できるか楽しみにしているところです。

終わりに

北海道農業土木測量設計協会員の一人として、これからも農村整備事業に真摯に向き合い微力ではございますが皆様方と共に何か一つでも多く貢献できるよう努めて参りたいと思います。

最後になりますが、協会並びに協会員の皆様にとって今年一年が素晴らしい年となりますようお祈り申し上げます。社長に就任してまだ3年目であり、まだまだ至らぬ点が多々あると思いますが、今後とも一層のご指導ご鞭撻を頂けますよう宜しくお願い致します。





株式会社 中央エンジニア

代表取締役 上垣 直裕

はじめに

新年あけましておめでとうございます。日頃より、北海道農業土木測量設計協会の皆様には大変お世話になっており、心より感謝申し上げます。

令和5年5月より代表取締役に就任いたしました、上垣直裕と申します。このたびは「農土測協時報」にて社長紹介の機会を賜り、誠にありがとうございます。簡単ではございますが、この場をお借りして、会社の概要と私自身のことをご紹介します。

会社紹介

弊社は、亡き父・上垣裕が昭和52年2月に帯広市で「株式会社中央測研」として創業いたしました。その後、平成19年1月に株式会社ノーヴァエンジニアと合併し、現在の「株式会社中央エンジニア」となりました。

皆様の温かいご支援とご指導のおかげで、来年には創業50周年という大きな節目を迎えることとなり、改めて身の引き締まる思いでおります。

創業以来、測量や調査・設計業務を通じて地域の社会基盤整備に携わってまいりました。平成30年には、農業農村整備事業優秀業者として北海道知事より感謝状を頂戴し、役職員一同、大きな励みとするとともに、これまで以上に責任の重さを実感しております。

自己紹介

私は昭和52年生まれの帯広市出身です。日本大学工学部土木工学科を卒業後、地元の中堅ゼネコンに勤務し、道路や漁港、農地改良工事などの現場代理人として経験を積んでまいりました。当時はICT施工技術が現場に導入され始めた時期でもあり、新しい技術に触れながら仕事に向き合えたことは、現在の大きな財産になっていると感じています。

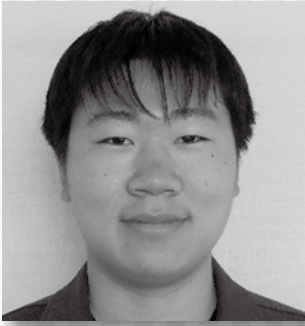
平成25年4月に弊社へ入社後は、現場業務に加えて社内業務にも携わり、試行錯誤を重ねながら会社経営に関わってきました。代表取締役就任後は、「技術は人が使い、人が育てるもの」という考えのもと、社員一人ひとりの声に耳を傾け、風通しの良い会社づくりを心がけています。

私事ではありますが、今年からゴルフを始めてみようと考えております。機会がありましたら、協会員の皆様とも一緒にできれば嬉しく思います。

終わりに

近年、自然災害の激甚化や人材不足など、業界を取り巻く環境は一層厳しさを増しています。若手技術者が安心して成長できる環境を整え、技術を次世代へ確実につないでいくことが、経営に携わる者の責務だと考えております。

今後とも、協会ならびに協会員の皆様と歩調を合わせながら、農業農村整備事業に貢献してまいりますので、変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



「資格取得から現在の仕事について」

菊地技術コンサルタント株式会社

竹内 紫音

私は現在の会社に令和4年4月に高卒で入社をして、3年間高校で学んできた知識を生かしながら1年測量の業務を行っていました。ですが、高校のみの知識でさらに測量士補の資格も所持していない今の自分では、立派な測量技術者になるのは難しいと感じていて、今後測量の仕事が続けていくには測量士補や測量士の資格そして、今よりも深い測量の知識が必要不可欠であると考えていました。そんな時会社から測量の専門学校への入学を勧められ、さらに測量士補の資格を所持していない人は卒業と同時に測量士補の資格を取得でき、基礎的なことや今よりも深い測量の知識学ぶことができるという点で将来自分の為になると思い令和5年度に札幌工科専門学校の測量情報科に企業委託生で入学しました。クラスは10代から40代までの幅広い年齢層で20名全員が企業委託生でした。

入学後は、自己紹介などを行いクラスメイトとの交流を深めました。その年は新型コロナウイルスの影響はあまり多くなかったのではほとんど対面授業で行うことができましたが中にはオンラインで授業に参加している生徒もいました。

実習では、モエレ沼公園での水準測量、多角測量、GNSS測量、山地での地形測量、学校周辺での電子平板を用いた地形測量などを班の仲間と協力しながら行いました。その他に、札幌市内の電子基準点を見に行き実際に山に登り一等三角点を見に行き、旭川で伊能忠敬や川村力子トなどの測量に関する偉人についても学ぶことができました。

そして、12月の測量士補試験では授業で過去問を繰り返し解いたり、クラスメイトと試験に出そうな問題を共に勉強しわからない箇所は先生方に聞いたりクラスメイトと教えあったりして本番では無事合格することができました。

学校を卒業して、会社に戻ってきた後は学校で学んだ基礎や知識を業務に生かしながら作業を行いまだまだ未熟なところだらけなので会社の上司や先輩方に教えてもらい立派な測量技術者になれるよう一生懸命に努力していこうと思います。

最後に、今回通学の機会を与えてくださりご支援いただいた北海道農業土木測量設計協会の皆様、忙しい中1年間も専門学校に通わせていただいた会社の方々、わからない箇所を理解できるように何度も教えていただいた札幌工科専門学校の先生方、そして1年間互いに協力しサポートして下さったクラスメイトの皆様にこの場を通じて深く感謝申し上げます。





「入学から卒業まで1年間を振り返って」

菊地技術コンサルタント株式会社 松田 啓太

私は現在の会社に令和4年4月に入社しました。帯広工業高校出身だったので基礎的な技術や知識はありましたが、更なるステップアップと測量技術者として続けていくために必要不可欠な測量士の資格を取得するため、入社1年後に企業委託生として令和5年度に札幌工科専門学校の測量情報科に入学しました。クラスには10代から40代後半までと幅広い年齢層で、クラス全員が私と同じ企業委託生でした。私よりも実務経験が上で知識や技術そして現場での応用力がある人たちが多かったので、この1年間で格段に成長できると入学して直感しました。

入学後は自己紹介を行ったりしました。その後、各講義でのオリエンテーションを行い、説明の中で定期試験の内容や1年間に行う講義の内容、そして講義に取り組む姿勢（関心・意欲・態度）などについて説明を受け、勉強が全てではないことを改めて感じました。

実習に関しては、GPS測量機を用いたGNSS測量や学校周辺の地形を知る目的で行った電子平板を用いた平板測量や山地での地形測量、モエレ沼公園での水準測量、学校周辺で行った基準点測量を行い実際に会社の業務で行っていた作業を基礎から深く学びなおすことが出来たので、とても充実した時間を過ごすことが出来ました。他には現場実習として旭川に行き伊能忠敬や川村カヲトなど測量に関する偉人について学習しました。また、その時代に使用された測量機器を実際に見て今の測量技術の原点であることを学びました。札幌市内でも現場実習がありました。まず数か所電子基準点を見に行き、その後、山に登って一等三角点を見に行きました。そこで基準点の重要性などについて深く学びました。

そして、12月下旬に行った測量士補試験では、試験対策として各先生方からの教えや授業の中で過去問を何度も繰り返し解いたりしました。また、学校だけではなく家でも間違った問題を確認したり、クラスメイトと一緒に問題に向き合い教えあったりしました。本番では会場の雰囲気により若干圧倒されましたが、無事に測量士補試験に合格することができました。

学校を卒業し、会社に戻ってきた後は学校で学んだ知識や技術を活用できる場所は最大限に発揮し、未熟な部分に関しては会社の先輩方たちに教えてもらいながら全力で仕事に励んでいます。これからも仕事の責任感や業務の大切さを感じながら仕事に向き合っていく、今よりも更なるステップアップに努めていきたいと思っています。

最後に、今回通学の機会をいただいた農土測協の皆様をはじめ迷惑をかけながらも学校に通わせていただいた会社の皆様や札幌工科専門学校の先生、周りの皆様におかれましてサポートをしていただき誠にありがとうございました。この場を通じて感謝申し上げます。



農業農村整備事業 優秀業者感謝状贈呈式

令和7年11月14日、ホテル札幌ガーデンパレスにおいて「令和7年度農業農村整備事業優秀業者感謝状贈呈式」が執り行われました。

この感謝状は、前年度に完成・完了した工事・委託業務に関し特に優秀な成績を収め、本道農業農村の振興や発展に大きく寄与した業者に対し贈呈されるものです。

委託部門受賞者のうち当協会会員からは、(株)ルーラルエンジニア、(株)田西設計コンサル、大地コンサルタント(株)、北王コンサルタント(株)の4社が選ばれました。

表彰式では、選考経過の報告の後、鈴木農政部長より各社の代表に感謝状が手渡されました。

鈴木部長は、農業農村整備事業は他の公共事業とは異なり「地元農家等に配慮したきめ細かな対応によって素晴らしい成果を上げた」と受賞者を称賛され、令和7年4月に、国が新たな「食料・農業・農村基本計画」を策定したところであり、我が国の食料安全保障の確保に向けて本道に対する期待と役割は今後ますます高まっていくものと考えられ、基盤整備の着実かつ計画的な推進を目指すため「これまでの豊富な経験で培った優れた技術をさらに発揮して欲しい」との協力を求められました。



(株)ルーラルエンジニア



(株)田西設計コンサル



大地コンサルタント(株)



北王コンサルタント(株)





協会行事予定

令和7年度		
12月	12月～	各地域懇談会
1月	1月15日（木）	第4回 理事会（ポールスター札幌）
3月	3月1日	測量士資格取得支援事業 令和8年度募集開始
	3月中旬	業務推進委員会
令和8年度		
4月	4月15日（水）	定期監査
	4月22日（水）	第1回 理事会（ポールスター札幌）
5月	5月27日（水）	令和8年度 通常総会（ポールスター札幌）

お知らせ

会員の人事動静

・岩見沢測量設計(株)

令和7年8月 参 与 浅 野 賞 一
代 表 取 締 役 林 崎 淳 一

・東邦コンサルタント(株)

令和7年9月 取 締 役 会 長 橋 俊 之
代 表 取 締 役 小 松 雄 次

・(株)細道コンサルタント

令和7年9月 取 締 役 会 長 久 保 佳 幸
代 表 取 締 役 社 長 久 保 貴 裕

・(株)北海道農業建設コンサルタント

令和7年9月 特 別 顧 問 大 西 秀 典
代 表 取 締 役 社 長 紺 野 昌 弘

・(有)板橋測量設計事務所

令和7年10月 会 長 板 橋 延 俊
代 表 取 締 役 社 長 相 澤 勝 歳

・(株)国策測量設計

令和7年11月 取 締 役 会 長 松 本 哲 郎
代 表 取 締 役 岡 田 弘 道

おくやみ

・パブリックコンサルタント(株)

代表取締役会長 安田 容昌 様（88歳）

令和7年9月4日 没

ご冥福をお祈りいたします

撮影秘話

内外エンジニアリング北海道
藤原 弘昭



僕のイト活（イトウをめぐる活動）がシーズン終盤を迎える10月になると海ワシ類がロシア方面から北海道にやってくる。海ワシ類とはタカ目タカ科に属する大型の鳥類のうち、海岸や大きな湖沼、河川といった水辺に生息し、魚を主な餌とするワシの総称で、北海道ではオオワシ・オジロワシの2種が生息する（2020、2021年、僕が根室に居た年にハクトウワシが2年連続で確認された例あり）。なお、オオワシは越冬のため冬期のみが生息だが、オジロワシは留鳥といい通年生息するものもある。

この日も宗谷に渡ってきたばかりの海ワシを求め、彼らが多く集まる場所へ向かった。目的地に着くと予想どおりの光景でいそいそと撮影を始めた。少しして何気なく後ろを振り返ると白い大型の鳥の一団がいたので白鳥かと思いカメラの望遠を向けて驚いた。なんと根室時代に見慣れたタンチョウではないか。数えると9羽いる。これまでも宗谷管内で1、2羽な

ら確認しているが、9羽もいて驚いたのだ。想定外の被写体に向けシャッターを切っていると偶然にも画角の中にオジロワシが入り込んだのがこの写真だ。

さて、タンチョウだが、近年は釧路方面の生息地が過密になり、十勝、根室、胆振などにも徐々に分散してきているようで、宗谷でも確認されてはいるものの、道の調査報告によると最大でもR5の8羽であり、今回の1箇所9羽というのは貴重なデータかもしれない。

また、道のHPによると、タンチョウは明治中期に一時絶滅したと考えられたが、その後見つかり、1935年に国の天然記念物に、1952年には特別天然記念物となり保護対策が講じられたことから最近では1000羽を超える数が観察されるようになり、越冬地の分散なども各地で取り組まれているようだ。

農土測協時報

令和8年1月版



発行

一般社団法人 北海道農業土木測量設計協会

〒060-0002

札幌市中央区北2条西3丁目1-21 札幌北2条ビル5階

TEL : 011-205-5310 FAX : 011-222-3277

E-mail ndsk-hata@dune.ocn.ne.jp

ホームページ <http://hokkaido-ndsk.or.jp/>

印刷

東洋株式会社

